

宗祖親鸞聖人の「生涯」③

六角堂の夢告く結婚く在家仏教の誕生

六角堂の夢告

行者宿報設女犯

我成玉女身被犯

一生之間能莊嚴

臨終引導生極樂

意味をもつのか、しばらく考えてみたいと思います。

最初に、この「女犯^{にょぼんげ}偶」の意味ですが、おおよそ以下になるのではないのでしょうか。「行者よ、もしあなたが宿報によって女犯の罪を犯さずにおれないならば、救世観音の私が玉のような女性となってあなたに犯されましょう。(そして観音の力で、あなたの犯した「罪」を浄土に往生する「徳」に転じてあげましょう。つまり) 私は一生あなたに連れ添い、あなたの人生を意味あるものにしてあげます。そして人生の終わりに臨んでは、あなたを引導して阿弥陀如来のまします極樂浄土に生まれさせてあげます。(決して女犯の罪により地獄に堕ちると恐れてはなりません)」。

われらの罪深さは個人的な努力を超えたもの、— いかにか誠にそれをやめ、それから抜け出ようとしても叶わぬもの、つまり「宿業」であることの確認がされています(行者宿報にてたとい女犯すとも)。そして、罪業深き身が真正正銘の私ならば、私にはついに救いはないのかと悲しんでいると、如来の方から「私^{わが}その罪を引き受けましょう」と手を差し伸べて下さったのです(我玉女^{わがたまにょ}の身となりて犯せられん)。阿弥陀仏は罪業深き衆生を裁くのでなく、宿業の身を生きるほかなき衆生の悲しみに寄り添うて下さる仏でありました。

そのうえ、浄土往生は後生(死後)のことかと思っていたら、「一生の間能く莊嚴して」と言われるように、現生(生きている時)からその利益が与えられると言うのです。また極樂への往生は、「臨終に引導して極樂に生ぜしむ」と約束してくださり、臨終の正念を心配する必要もなく、ただ今より約束されることになりました。つまり、阿弥陀仏の浄土へ生まれるには、非日常的な時空において自力の限りを尽くす(菩提心) ことが必要なのではなく、宿業の身を大悲してやまぬ阿弥陀仏の本願力に乗托することだけで

良かったのです。こうして如来の本願力に乗托する凡夫往生の道が開かれるとともに、助かるのはいまだ来ぬ「後世」のことではなく、ただいまの「現生」から始まることになったのでした。

このように、この夢告には、のちに法然上人のもとではつきりと自覚されてくる「ただ念仏」の教えの萌芽がすでにして含まれていました。だから救世菩薩は、「これはこれわが誓願なり。善信この誓願の旨趣を言説して、一切群生に聞かしむべし」と言われたのだと思います。

雑行を棄てて本願に帰す

— 地獄におちても後悔せず —

救世菩薩より夢告を受けた聖人は、迷わず法然上人のもとへ行き、その日から百日の聴聞を行われました。そして、ついに法然上人の「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」のお言葉信じて、専修念仏の行者となられたのです。

六角堂の救世菩薩から夢告を受けた聖人はその足で法然上人を尋ねられました。そのときの様子を聖人の妻・恵信尼が「六角堂に百日こもらせ給いて候いけるように、又、百か日、降るにも照るにも、いかなる大事にも、参りてありし」(『恵信尼消息』)と娘の覚信尼に書き送っています。

また、その百日の聴聞の間、法然上人は「後世ごせの事は、善き人にも悪しきにも、同じように、生死しじふ出でずまびまちをば、ただ一筋に仰せられ候いし」(『恵信尼消息』)ことを聞いて、親鸞聖人は「ここにようやく「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」とよきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。…たとい、法然聖人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさうさう」(『歎異抄』)と、自分の歩む道が決まったのでした。

この決定を聖人は『教行信証』の後序に、「愚ぐ禿とく釈しゃくの鸞らん、建けん仁にん辛かのとの西とりの曆れき、雑ぞう行ぎようを棄すてて本願に帰す」と記されています。

親鸞聖人が法然上人をお訪ねしたのは29歳の時でした(時に法然上人69歳)。それから始まった法然上人のもとでの聞法の日々は、空しき比叡での求道と違い、親鸞聖人にとって手応えのある毎日であったことでしょう。しかし、それも束の間、専修念仏に対して誹謗中傷を強める南都北嶺の圧力に、ついに朝廷は吉水教団に対して大弾圧を行うことになりました。結局、親鸞聖人が法然上人のもとで過こすすことが出来たのは6年間だけのことだったのです。

親鸞聖人がお訪ねした当時の吉水は、中の房(西山の広谷から移設した法然の庵室・知恩院の本堂あたり)と東の新房(門弟たちの宿舍・大鐘楼の東北)と西の旧房(同・山門の西南)から成っていたと言われていました。『法然上人行状絵図』(四十八巻伝)には、八畳ほどの部屋で經典を開き、集まれる僧俗に法を説いている様子が画かれています。吉水の庵室は現代に伝わるような大きな寺院ではなかったようです。

親鸞聖人は6年間、その吉水で生活していたのでしようか。それとも、妻の玉日と一緒に吉水に通ったのでしようか。

また、比叡のお山で「僧」であったときには国家からながしかの給付があったはずですが。しかし、山を降りてしまった聖人は、どうして生活をされたのでしようか。法然上人の庇護の下にあったのか、あるいは生活を支えてくれる檀越がいたのか、こんなことも気になります。判っておりません。

恵信尼との結婚

— 在家仏教のはじまり —

法然上人に帰依した親鸞聖人は、六角堂の夢告に導かれて結婚に踏み切られました。結婚は、破戒の罪を恐れて「僧」の踏み込めなかつた領域だったのです。

『親鸞聖人正明伝』では、法然門下となった歳の暮れ、十月上旬に九条兼実と法然上人の信仰談義から、聖人の意に反して兼実の娘・と結婚することになったと書かれています。しかし今日では、玉日姫との結婚説は聖人を美化するための作り話でないかと疑われています。それなら、親鸞聖人が結婚した相手は誰なのかというところ、九条兼実家の家司けいしであった三善みよしため為教の娘

の恵信尼ではないか、というのが今井雅晴氏らの説であります。彼女は父と兼実の関係から、兼実の娘・藤原任子ふじわらにんし（後鳥羽上皇の中宮、後に出家して宜秋門院ぎしゅうもんいん）に仕える女房にようぼうだったと推測されます。恵信尼は親鸞聖人との間に6人の子供を生んでいます。その結婚は吉水時代から始まるのではないかと、今井雅晴氏らは推測されています。

ともかく六角堂の夢告の内容から考えても、聖人が吉水時代に結婚したのは間違いないでしょう。問題は、その結婚を法然上人が承認していたかということでもあります。これまでの仏教の教えでは僧の結婚は絶対に許されない破戒行為でした。当時、多くの僧が妻子をもっていたのですが、建前上は戒を保って結婚していかないことになっていたので。親鸞聖人の結婚はその偽善性を真正面から否定するものでありました。法然上人は常ひごろ「現世をすぐべきよつは念仏の申されんようにすべし。ひじりて申されずば妻を設けて申すべし。妻を設けて申されずばひじりにて申すべし」『和語灯録』と言われておりました。法然上人は若き親鸞の決断を念仏の教義でもって守護して下さったのではないのでしょうか。

親鸞聖人は、法然上人が獲得した本願他力の教義（末法の時代においては凡夫こそ本願の正機であるという教え）の急進的な実践者であったようです。聖人の選びは確信犯であり、隠すことなく、必然的に社会の耳目を集めることになりました。こうした吉水門下における聖人の位置が、次第に強くなってきた念仏弾圧の嵐をまともに受けることになる要因であったと思われれます。

*平雅行氏によれば、平安時代の末頃には、僧の結婚は、建前は別にして現実的には一般化されていたという。たとえば、親鸞聖人が尊敬した『唯信鈔』の著者、聖覚法印は、抑揚をいれて人々に説教

をする安居院流の創始者である澄憲の第三子であり、自身も妻帯して10人の子どもがいました。

如来よりたまわりたる信心

― 自力の信・他力の信 ―

カリスマ性があり、一切を包み込み決して棄てない法然上人のもとには、男女貴賤を問わず多くの人々が集まってきました。彼らは上人の勧めのままに念仏を歎ぶのですが、人間の根っこに巣くう雑行雑修の心を棄てて真実信心を獲得することは至難のことでした。念仏を「呪文」のように思っている人。法然上人に依存する「善知識のみ」の人。親鸞聖人は法然上人のもとで、「大乘の仏道としての念仏」を明らかにすることに全身全霊を傾けられたことと
思います。

の諍論、二つは信行両座の諍論、三つは体失不体失往生の諍論です。

信心一異の諍論は、『歎異抄』と『御伝鈔』に出ています。あるとき親鸞聖人が、「善信が信心も、聖人の御信心もひとつなり」とおっしゃったところ、他の弟子が「いかでか聖人の御信心に善信房の信心、ひとつにはあるべきぞ」と反論してきたので、「聖人の御智慧才覚ひろくおわしますに、一ならんともうさばこそ、ひがごとならぬ。往生の信心においては、まったくことなることなし、ただひとつなり」とおっしゃった。法然上人も、「源空が信心も、如来よりたまわりたる信心なり。善信房の信心も如来よりたまわせたまいたる信心なり。されば、ただひとつなり」とお答えになられた、というのです。

また信行両座の諍論は『御伝鈔』に出ています。あるとき親鸞聖人が、吉水に集まった弟子方にお互いの信仰の中身を問うた話です。つまり、阿弥陀仏に救われるのは信心によるのか（信不退）それとも念仏の行によるのか（行不退）という問いです。この問いかけに多くの弟子は答えきれず、聖覚、信空、法蓮、熊谷直実、それに親鸞聖人と法然上人だけが迷わずに答えたといわれています。

三つめの体失不体失往生の諍論は『口伝鈔』（聖典66頁）に出てくる争論です。親鸞聖人が「念仏往生の機は体失せずして往生をとぐ（専修念仏の人は死なずして往生する）」と言われたのに対し、善恵房証空が「体失してこそ往生はとぐれ（煩惱で汚れたこの身が亡くなって、つまり死んでから浄土に生まれる）」と反論した話です。それを聞いた法然上人は、両方ともに「さぞ（なるほど）」と、まず応えられました。その上で、親鸞聖人のいう不体失往生は「第十八願の念仏往生の機」のことであり、善恵房のいう体失往

法然上人には、凡夫往生の道を明らかにした専修念仏の行者の面と、九条兼実たちに戒を授けて救済を約束していった「念仏聖」の面とがありました。聖人を慕ってきた門弟の多くも、知的には専修念仏の教義に肯きながらも、その心情は法然上人のカリスマ性に惹かれていた、というのが実情だったようです。親鸞聖人は吉水時代に法然上人を巻き込む形で、他の弟子たちと教義論争を三度おこなっています。一つは信心一異

生は「(第十九願の) 諸行往生の機」のことであることを明らかにし、そして「念仏往生は仏の本願なり。諸行往生は本願にあらず」と説かれたのでした。

悲喜の涙

— 『選択集』の書写を許される —

法然上人の教えを信受して「雑行を棄てて本願に帰す」ことになってから4年、33歳の親鸞聖人は、法然上人より『選択本願念仏集』の書写並びに上人の「真影の図画を許されるとともに、「夢の告げによって」新しい「名」をいただくことになりました。

これらの物語を通して知らされることは、弥陀の本願を信じるといいつつも、自己の善根功徳を頼りにする自力の執心の根深さです。「正信偈」において「難中之難無過斯」と言われているように、弥陀の本願を信じ、弥陀の本願に乗托していく他力の信心(真信心)の獲得を前にして多くの弟子たちが躓いてしまっていたのです。

それに対し、親鸞聖人は新参の弟子であったのにもかかわらず、専修念仏の教えを正しく受け取っていかれました。法然上人はこのような親鸞聖人を歎ばれて、『選択本願念仏集』の書写と真影の図画、それに綽空に変わる新しい「名」を許されることとなります。そのことは『教行信証』の後序に詳しく述べられています。

元久乙の丑の歳、恩恕を蒙りて『選択』を書しき。同じき年の初夏中旬第四日に、「選択本願念仏集」の内題の字、ならびに「南無阿弥陀仏 往生之業 念仏為本」と、「釈の綽空」の字と、空(源空)の真筆をもって、これを書かしたまいき。同じき日、空の真影申し預かりて、図画し奉る。同じき二年閏七月下旬第九日、真影の銘に、真筆をもって「南無阿弥陀仏」と「若我成仏十方衆生称我名号下至十声 若不生者不取正覚 彼仏今現在成仏 当知本誓重願不虚 衆生称念必得往生」の真文とを書かしたまう。また夢の告に依って、綽空の字を改めて、同じき日、御筆をもって名の字を書かしたまひ畢りぬ。…(中略)… 年を涉り日を涉りて、その教誨を蒙るの人、千万といえども、親と云い疎と云い、この見写を獲るの徒、はなはだもって難し。しかるに既に製作を書写し、真影を図画せり。これ専念正業の徳なり、これ決定往生の徴なり。仍って悲喜の涙を抑えて由来を縁を註す。〔聖典三九九頁〕

親鸞聖人は法然上人のもとで、本願他力の念仏の教えは神秘的な呪文でもなく、また独り善がりな思い込みでもない正真正銘の仏道であることを、浄土の經典や七高僧の論釈によりながら明らかにしていかれたのではないかと思えます。

(参照)

林郁夫 「完璧な円にしたい」

出家ということで考えさせられるのは、治療省長官だった林郁夫さんの話です。彼は「大学卒業後の生活の中で、自分に欠けている部分、欠点を補いたい、完璧な円にしたいと思っていたんです。それで原始仏教の本をいろいろ読んだ時、解脱やさとりができる」と聞いて、このときは阿含宗に入っております。それから「オウム」に出会い、病院をやめて家族ともども出家する時には、「一日も早く悟りと解脱を得て、偏りのない心を持って社会に還元できるように努力する所存です」という挨拶状を出しています。

ここにある「自分に欠けている部分を補い、完璧な円になりたい」という意識は、「オウム」の人々に通ずるものです。「オウム」の人たちは白いサマナ服を着ていました。これは、薄汚れた自分をもう一度真っ白にしたい、という願望の表現だそうです。一見まじめそうに見えるこうした考えは、実は病んだ意識なんだと気づくことができるか？ここに「オウム」の問題が凝縮していると思います。「オウム」に残った人も「オウム」から離れた人も、その多くは今でも、自分たちが取った方向性は正しいと思っております。スタートの最初にある、完璧を求め醜さを憎むその意識そのものを問えないでいます。

井上嘉浩 「自分自身を破壊したい」

十六歳になった井上さんは麻原彰晃に向かって、こう言ったということです。

「先生、私は自分自身を破壊したい、自分自身を木端微塵に破壊したい。それはどういうふうにすればよろしいんですか」。「私は自我が自分の中で蠢くのが嫌いでたまりません」。「自分自身が恨みや嫉みいろいろなものを感じてふるまっているのが僕は嫌いでたまりません。自分自身が穢れていることを自分で十分認識して、自分のそういうものを木端微塵に壊したい」と。

人間は成長の過程で、大なり小なりこういう衝動に駆られることがあります。問題は、その時、これを受け止めてくれる大人が身の回りにいるかということです。ほとんどの場合、父も母も学校の先生も、ただ戸惑うばかりであります。麻原はこういう問いを真正面から受け止めて見せたのでしょうか。だから井上さんは、また多くの若者が、すべてを捨てて出家したのです。